

農業の新しい技術

587（平成20年7月）

分類コード 02-04

熊本県農林水産部

県育成ニガウリF₁品種「熊研BP1号」の 半促成作型における安定多収のための着果技術

農業研究センター 農産園芸研究所野菜研究室

担当者：林田慎一

研究のねらい

本県では平成17年に多収で果実形質が優れ、苦みの少ないニガウリ品種「熊研BP1号」を育成した。通常、ニガウリは着果に人工受粉を必要とするが、その頻度については不明な点が多い。

そこで、本県ニガウリの主力作型である半促成作型において、当品種の特長を活かした安定多収のための着果技術を確立する。

研究の成果

6.5節、5節、4節当たりで一果の割合で着果させた区、および、ほぼ全ての雌花を着果させた全着果区の計4区を設け、収量性や果実品質等について検討した。

- 1.内張用アーチパイプを利用した慣行誘引法での着果は、4節当たりで一果の割合が商品果収量が高く、適当である(図1)。
- 2.開花雌花全てを着果させると、着果負担が大きく草勢が低下するため商品果収量は激減する(図1、写真1)。
- 3.着果数が多すぎると販売に適さない規格外品の発生が多くなる。中でも肥大が遅いため、種子の周囲が着色する過熟果が多く発生する(表2)。

普及上の留意点

- 1.ニガウリは一般に低温で雌花が多くなり高温で雌花が少なくなるので、低温時期には着果過多に、高温時期には着果過少に注意し、着果の間隔を調整する。
- 2.曇雨天等により草勢が弱い場合には着果の間隔を広くする。
- 3.ニガウリは各節に雄花または雌花のどちらか一方を着生するが、その配列は株により異なるため、着果割合は目安である(写真2)。

[具体的データ]

熊本県農林水産部

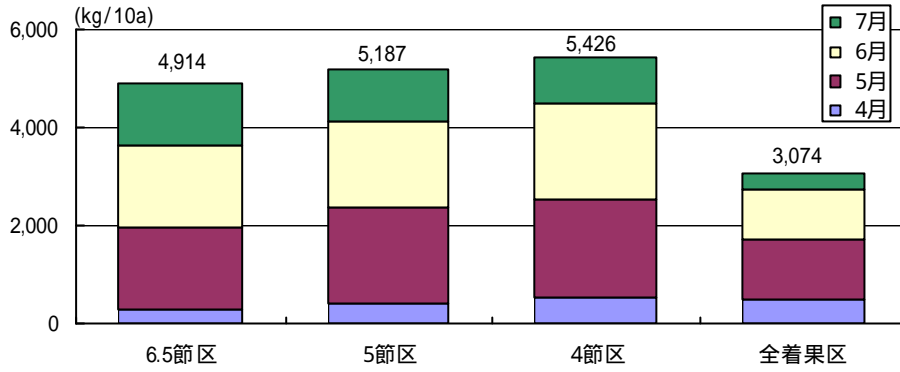


図 1 着果割合と時期別商品果収量との関係

定植は平成18年 2月21日、収穫期間は 4月23日から 7月31日まで
収穫は250~280gを目標とした



写真 1 全着果区の草勢低下
(矢印 : つるの先端部が細くなる)

表 2 着果割合と規格外品収量との関係

(10aあたり)

区	曲がり		変形		短形		過熟果	
	果数 (本)	重量 (kg)	果数 (本)	重量 (kg)	果数 (本)	重量 (kg)	果数 (本)	重量 (kg)
6.5節区	0	0	350	60	100	13	0	0
5節区	50	7	300	48	600	106	50	10
4節区	50	6	283	49	400	70	350	66
全着果区	50	10	1,200	191	1,750	295	4,800	937

過熟果は種子の周囲が着色している果実
収穫は250~280gを目標とした



写真 2 ニガウリの着花
(矢印は雌花、摘葉済み)